



ほら、あのさ、天気予報って、あるだろ。

毎朝、テレビで、「さて、きょうのお天気は」っていうやつ。

あれを見て、ママは「あら、今日は昼から晴れるから、おふとんを干しとこうかしら。」とか、つぶやいたりする。

だけど、ぼくは、すごくふしぎなんだ。きのうはあんなにぴっかり晴れてたのに、天気予報で「明日は雨でしょう。」っていったら、本当に朝から雨がざんざんふる。いったい、どうやって、未来の空のことが、あんなにくっきりとわかるんだらう。

あんまりふしぎだから、こないだ、パパに、きいてみた。

日曜日のたっぷりおいしい朝ごはんのあと、パパは、陽だまりのソファで、たばこに火をつけていた。初夏の光のまぶしい、日曜の朝だ。はちみつとパンケーキと紅茶とコーヒーと、ミルクを沸かした後のほのかな匂い。

「うむむ。それはだなあ...、」

パパは、かすかなうなり声のあと、ゆっくりたばこを吸いこみ、きれいな煙のわっかをひとつ、ぽくっとふいた。

白い煙のドーナッツ。

白いわっかは、五月の朝の、金の光をあびて、天使のわみみたいに、きれいにすきとおる。ぷっかりと天井にのぼって、ふにやりとくずれる。

パパは、それをしばらくながめてから、ゆっくりとこういった。

「そりゃあ、おまえ、この国にはだな、キショウチョウっていうところがあったらなあ。」

...ぷかり。もうひとつ、天使の輪が、天井にゆらめいてのぼってゆく。

「これが、すごいところなんだ。そこにはな、ものすごくたくさん、空の秘密があつまってる。世界じゅうのお空の秘密を、電気そうじきみたいにみいんなすいとってるんだ。それで、えらいはかせたちが、大きな機械にそのひみつをたっぷり詰めて、ちょいちょいといじくると、あしたのお天気が、すぽんとでてきちゃうんだ。きのうの夕ごはんのことを思い出すくらい、かんたんさ。...健二もな、もう少し大きくなったら、キショウチョウくらい、見学しにいくといいや。そしたら、どんなにすごいかって、よくわかるさ。ねえ、ママ。」

ママは、お皿をふきながら、にっこり笑って、そうよ、そうよ、とうなずいた。パパのいうことは、いつも、すごく正しいのよ。

キショウチョウかあ。まりちゃんは知ってるかな。

ぼくは、ドラえもののうんどうぐつをはいて、庭にでた。

まりちゃんっていうのは、ぼくのひまわりのことだ。庭のすみに、とっても立派に立っている。

ぼくが種を植えて、僕が毎朝お水をあげて話しかけて育てた、ぼくだけのまりちゃん。まだ花も咲いちゃいない、固い緑色のつぼみ。それなのに、いつの間にか、まりちゃんは僕よりうんといろんなことを知っているようになった。よくわからないことがあったら、ぼくはいつでもまりちゃんのところに聞きに行くんだ。

ぼくのしつもんをきくと、まりちゃんは、こきりとかくびをかしげた。まりちゃんがこくびをかしげるようすというのは、ほんとうに、とてもとてもかわいらしいのだ。

「キショウチョウね…。もちろん知ってるわよ。キショウチョウっていうのは、空の色をした、青いチョウチョのことよ。ひまわりなら、みんな知ってるわ。羽の色は、こっくりと濃い空の色。世界中のお空のすべての色を溶かし込んで、ひらひら。雲の色、雨の色、夕方の茜色も、朝焼けの桃色も、みいんな、溶かし込んで、ゆらゆら揺れる、光の色の羽。濃い紺色の模様のところには、小さな星がちらちらまたたいてる。…神様のチョウチョよ。明日の天気も風の強さのことも、みいんなその中に小さくたたまれてはいつてる。テレビの中の天気図も数字もグラフもみんな、はかせが、そのチョウチョのひみつをほんやくしてテレビの人にわたしてるんだから。」

ひみつだって？ ぼくは、ふしぎなお話に、びっくり。そして、なんだかわくわく。

「…健ちゃんに、そのひみつ、見せてあげようか。ね、トクベツよ。まりの葉っぱに手をあててみて。」

びっくりしたまんま、ぼくはさしだされた一枚の葉っぱにそっとふれた。

そのとたん、頭の中がぱあっと明るくなった。青い空と金のたいようと、みどりいろの葉っぱがみんなみんな、ぐるぐるまぎって、頭の中で、ぴかあっとひかったみたいだった。

「わしがキショウチョウじゃ。コドモよ、何か聞きたいことがあるのかの？」

...気が付くと、豪華なドレスの、美人のお姉さんみたいな、青いきれいなちょうちょが目の前にいた。だけど、声は、しわしわしていて、すごいおじいさん言葉だった。

ぼくはやっぱり、とってもびっくりしたんだけど、それは顔にださないで、きいてみた。

「うん。ねえ、キショウチョウさん、あなたのどこが、どんな風に、お空のひみつなの？」

「ふん。このワシの姿を見てわからんか。しょうがないコドモじゃな。ちょっと見ててみい。

」

キショウチョウは、ぱたぱたぱたと羽をふるわせた。そうしたら、虹のように輝く羽が、きらきらきらきら、やさしい光の粉をぼくに振りかけて、ぼくは、その透き通った光につつまれた。

虹の七色が甘いドロップのしずくみたいに、頭の中にふわふわ。そして、その中から、すうっと広がったのは、黄金色に輝く、真夏の朝の光。ぎんぎらお日さまの光。何だか、身体の芯が、焼きたてのパンみたいにぽかぽかしてくる。身体をなでてゆく、ゆるりとぬるい、のんびりした南国の風。どこからか、甘いパイナップルやココナッツやの匂いがする。それから、青い海の匂い。

「ほら、これがハワイの太陽じゃよ。...これが、お空のひみつ中継じゃ。わかるかね。ワシは、世界のお空の光エネルギーを集めて、どこへでも運んでゆく、ひみつ中継ステーションなのじゃよ。」

ぼくは、とってもふしぎな気持ちだったけど、キショウチョウのいうことはとってもよくわかったような気がした。ハワイの空の光も匂いも、まるごと「ここ」につれてくる。

...きっと、キショウチョウの秘密っていうのは、世界一のコンピューター・ネットワークもかなわない、そんなすごい、ヒマワリ・チョウチョ・スカイ・ネットワークみたいなものの秘密のことなんだ。

「...お空のひみつって、すごいなあ。ぼくんちのテレビでやるゲームより、ずっとすごい！ いったつも、世界じゅうの空が、ぼくの中にあるみたいだ。」

「もちろんそうじゃ。なんで人間どもはそれに気付かんのじゃろう。しょうがないから、ワシは、キショウチョウになって、機械の中に入り込んで、数字や電波になって、人間どもにもわかるようにしてやっとなんじゃわい。こんなことしなくても、少し耳をすまして、目をこらしてれば、みんなわかることなのにな！ おまえ、まりちゃんのトモダチのようじゃから、少し空の見方を教わってみるんじゃな！ お日さまのことも、風の吹き方も、お月様が毎晩お前に話しかけていることも、もっとよく分かるようになるはずじゃ。」

ぼくのまりちゃんって、そんなにすごいヒマワリなのかあ。

...それにしても、キショウチョウって、きれいでじじむさくてちょっと変だけど、でも、ほんとにすごい。ぼく、もう少し大きくなったら、もう一度、パパ経由のキショウチョウにつれていってもらおう。

パパと一緒になら、ひみつはもっとすてき。

きっと、そのときは、お空のひみつは、みんなみんな、ぼくの中に入り込んで、ぼくはハワイの太陽みたいにぴかぴかになれる。

そうだ、ほんとうは、晴れてるときも、曇ってても、嵐でも、いつも、ぼくの中には、あのハワイの太陽のきらきらがしまわれてる。そしたら、ママにしかられても、となりのたかしくんとけんかしたときも、むしゃくしゃむしゃくしゃの黒雲の向こう側に、いつもきらきらをなくさないでいられるのかもな。

...なんだか、何となく、ぼくはそんな気がした。

そうなんだ、何もかも、いろんなすてきなことは、いつも、まりちゃんから始まる。まりちゃんと話すのは、やっぱり、ぼく、大好きだ。

ぼくのまりちゃんは、ぼくだけの、トクベツ。

毎朝輝く太陽のようにきれいでかしこいまりちゃん、よくわからないことがあったら、ぼくはいつだって、まりちゃんのところに聞きに行くにのさ。

まりちゃんの天気予報

<http://p.booklog.jp/book/53439>

著者 : yamamomon

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/yamamomon/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/53439>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/53439>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ